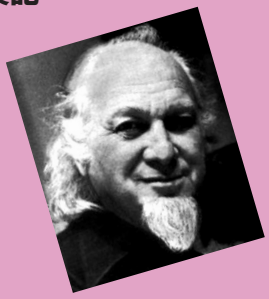
ROOT 2
route to music

T.K.特集 再入門編 PART.1
芽瑠璃堂マガジンWEB 人気記事紹介
芽瑠璃道～芽瑠璃堂の原点を辿って
葉月賢治の編集後記



HISTORY OF MIAMI SOUL

T.K Records　Alston　Blue Candle　Cat　Dash　Drive　Glades　Juana

マイアミ・サウンドを世界に広めたヘンリー・ストーンとT.K.

文＝葉月賢治

～T.K.特集 再入門編 PART.1～

HISTORY OF MIAMI SOUL

マイアミ・サウンドを世界に広めたヘンリー・ストーンとT.K.

2011年10月に紙ジャケット仕様で世界初CD化された＜Blue Candle＞の2タイトル、スヌーピー・ディーンの『ウィグル・ザット・シング』と13THフロアの『ステッピン・アウト』。同じく紙ジャケット仕様で世界初CD化されたオバタラの『オバタラ』や、ビギニング・オブ・ジ・エンド、ハーマン・ケリー ＆ライフなど、ここに来てさらに盛り上がりを見せるマイアミ・ソウル。この素晴らしい音楽を世界に広めたのが、ヘンリー・ストーンという人物でした。

この様な背景を踏まえた上でその良さを再確認すべくT.K.を特集していきたいと思います。

原稿を進めて行くにあたり、色々な資料を手に孤軍奮闘していくわけですが、あまりに膨大すぎる系列レーベルの多さと、成り立ち、事実関係の把握、そしてディスコグラフィーの豊富さが網の目の様に細かい上に複雑極まりなく、マイアミの海と空のように壮大なT.K.の全貌を、実質わずか6ページに収めるのは至難の業。ここはもう思い切って数を絞り、それぞれのレーベルの軌跡を辿って重要アーティストとその代表作を紹介していこうと考えました。

今回は入門編という事を意識して『T.K.特集 Part.1～再入門編』と題し、T.K.本体とT.K.傘下のレーベルを特集していきます。

大枠ではT.K. Records、Alston、Blue Candle、Catの4つ。そして小枠でDash、Drive、Glades、Juanaの4つで合計8つのレーベルを取り上げます。あれがない、これがないという意見はごもっともですが、今回のT.K.特集は第1弾。第2弾、第3弾もゆくゆくは考えていますので、どうぞお楽しみに。

もし彼がいなかったら、現在の音楽シーンは幾分違った寂しい物になっていたであろう。

ヘンリー・ストーンは1921年6月3日、ニューヨーク州ブロンクス生まれ。ヘンリーは少年時代である12歳の頃に伝説のジャズ・トランペット奏者ルイ・アームストロングに憧れてトランペットを吹き始めています。1943年にアメリカ陸軍（ニュージャージーにあるキャンプ・キルマー）に入隊、ここの軍隊バンドで多くの黒人ミュージシャン達と触れ、R&B音楽をより深い所まで知る事となります。この頃は第二次世界大戦真っ只中でしたが、1945年には終戦を迎え、翌年に除隊となります。この大戦が終わった後、ヘンリーはカリフォルニア州ロサンゼルスへと向かいます。しかしカリフォルニアに自分の居場所を見つける事ができず、1947年も終わりに近づいた頃マイアミへと向かいます。ここでヘンリーは、最初のディストリビューション会社を設立。さらにクリスタル・レコーディング・カンパニーという小さなレコーディング・スタジオを持ち、ここで、50年代初期にレイ・チャールズや、ウィルバート・ハリソン、その他ゴスペルやブルースのアーティストを手掛けるようになります。同時期にハンク・バラード＆ザ・ミッドナイターズの「The Twist」や、ジェイムス・ブラウンのデビュー曲「Please, Please, Please」などの制作にも携わります。その後、ヘンリーはアトランティック、ワーナー・ブラザーズ、エレクトラといったレコード会社のディストリビュートもしていましたが、1971年から1972年頃にかけて、この3社がWEAと呼ばれるひとつの会社になったことで、その必要がなくなりました。この頃アトランティックから＜Alston＞のレコードを配給しており、ベティ・ライトの「Clean Up Woman」とビギニング・オブ・ジ・エンドの「Funky Nassau」がそれぞれ100万枚以上のセールスを記録しています。この時ヘンリーは新たに自分自身のレーベルを始める決意をします。それがT.K. Recordsでした。この名前はヘンリー・ストーンの為に8トラック・レコーディング・スタジオを作ったエンジニアのテリー・ケインのイニシャルに由来しています。そしてこのT.K.の名の下に、傘下である＜Glades＞から初めてリリースしたのがティミー・トーマスの「Why Can't We Live Together」であり、この曲はビルボードでNo.1を獲得する大ヒットとなったのでした。

数々のヒット曲によって世界に広まったマイアミ・ソウルは、70年代中期に巻き起こったディスコ音楽をも代表する象徴的な存在でありました。その音楽が広く流行するための下地を作り、そこへ向けての礎を築いたのがヘンリー・ストーンという先駆者でした。もし彼がいなかったとしたら、現在の音楽シーンも幾分違った寂しい物になっていたことは容易に想像できます。

KC&ザ・サンシャイン・バンドやジョージ・マックレーが在籍していたT.K.を代表する重要なキーストーン

＜T.K. Records＞は1973年にヘンリー・ストーンが始めたレーベルです。そのアルバム・ディスコグラフィーを見ればわかる通り、このレーベルはKC&ザ・サンシャイン・バンドと、ジョージ・マックレーをメインに売り出す為のレーベルと言っても過言ではないでしょう。彼ら以外にこのレーベルにアルバムを残したのは、あのファンクの帝王であるJBこと、ジェイムス・ブラウンの『Soul Syndrome』（TK615）のみです。ヘンリー・ストーンとJBのつながりは、1956年に発売されたデビューシングルである「Please, Please, Please」の頃まで遡ることができます。シングルに関して言えば、1000番台を使用しており、ウィリー＆バーバラ「I Can Love／I Feel Like Lovin'」（TK1002）や、リン・ウィリアムス「Kisses, Kisses, Kisses／You Are the Greatest」（TK1006）などがありますが、やはりメインは何と言ってもKC&ザ・サンシャイン・バンドとジョージ・マックレーでした。

このレーベルから初めてリリースされたシングルは、KC And The Sunshine Junkanoo Band名義での「Blow Your Whistle／ I'm Gonna Do Something Good To You」（TK1001）で、1973年夏のこと。このシングルはビルボードのR&Bチャートで27位を記録するヒットとなっています。1974年の始めにようやく、KC And The Sunshine Band名義で「Sound Your Funky Horn／ Why Don't We Get Together」（TK1003）をリリースし、この曲も同チャートで27位を記録。そしてKC&ザ・サンシャイン・バンドとしての記念すべき1stアルバムとして『Do It Good』（TK500）を発売しました。ちなみにこのアルバムは1976年にジャケットを変更してリイシューされています。

が、何はともあれこのレーベルにとって最大のターニング・ポイントのひとつとなったのは何と言っても1974年に大ヒットを記録したジョージ・マックレーの「Rock Your Baby」（TK1004）でしょう。作詞と作曲はサンシャイン・バンドのハリー・ウェイン・ケイシーとリチャード・フィンチ。この曲を収録した7インチ・シングルはビルボードのシングル・チャート、R&Bチャートなどで堂々のNo.1を獲得し、イギリスでもNo.1を獲得。これはジョージにとってはもちろん初めての快挙であり、＜T.K.＞のオフィスはきっと歓喜に湧いた事でしょう。この曲が大ヒットを記録した1974年にはジョージ・マックレーの1stアルバム『Rock Your Baby』（TK501）が発売され、8月にビルボードのR&Bチャートで7位、アルバム・チャートで38位を記録する大ヒットとなっています。

1975年にはジョージ・マックレーの2ndアルバム『George McCrae』（TK602）や、KC&ザ・サンシャイン・バンドの『KC & the Sunshine Band』（TK603）などがそれぞれ発売されていますが、特にここで特筆しておきたいのが『KC & the Sunshine Band』。この作品はアルバム・チャートで4位、R&BチャートではNo.1を獲得する大ヒットを記録。収録曲の中には「That's The Way (I Like It)」「Get Down Tonight」「Boogie Shoes」といった彼らのキャリアを代表する曲が収録されており、正しく名盤として今日まで聞き継がれている作品と言えるのではないでしょうか。

その後もジョージ・マックレーのヒット曲「Rock Your Baby」をサンシャイン・バンドがインストでカバーしたバージョンが収録された『The Sound of Sunshine』（TK604）など、ほぼ毎年アルバムを発売していきます。作品数は、ジョージ・マックレーが5作品、KC&ザ・サンシャイン・バンドが8作品（ベスト盤含む）。しかし、1978年の映画「サタデー・ナイト・フィーバー」で人気が爆発したディスコ・ブームは、1980年代に入る頃には徐々に衰退。従って＜T.K. Records＞の出すレコードも大きくチャート入りすることは望めなくなっていきます。

そんな中、1980年にはジェイムス・ブラウンの『Soul Syndrome』（TK615）を発売。このアルバムは結果的に＜T.K. Records＞最後のアルバムとなりました。シングル「Rapp Payback (Where Iz Moses)」（TK1039）はR&Bチャートで46位、「Stay With Me」（TK1042）は80位となっています。

1981年も終わろうとしているある日、ヘンリー・ストーンが書類にサインをした事によって＜T.K. Records＞は破綻、廃業となります。そして1990年にはライノに＜T.K. Records＞のマスターを売却することとなりました。1973年にヘンリー・ストーンによって始まった＜T.K. Records＞は、1981年までの約8年間の間に、素晴らしい楽曲をレコードという形で世の中に発信し続けてきました。それらの楽曲は、2011年の今聴いても色褪せることなく、音楽自体の魅力によって新たなファンを獲得していることだと思います。ヘンリー・ストーンがレーベルを始める時に、どのような気持ちで立ち上げたのかは分かりませんが、こうして現在も新たなファンを生み出している事を思えば、結果的にはもちろん大成功であったと言って良いはずです。

T.K.RECORDS - Recommended Discs

George McCrae『Rock Your Baby』
TK501 / 1974年

KC & The Sunshine Band『KC & The Sunshine Band』
TK603 / 1975年

James Brown『Soul Syndrome』
TK615 / 1980年

経営者であるヘンリー・ストーンと、スティーヴ・アライモが自らの名を冠し、1968年にスタート

＜Alston＞はヘンリー・ストーンとスティーヴ・アライモが1968年に始めたレーベルで、この年の夏にAtlantic／Atcoと配給契約を結びます。＜Alston＞の名前の由来は二人のファミリー・ネーム『**AL**aimo-**STON**e』から取られました。最初の2枚のアルバム、ベティ・ライトの『My First Time Around』（SD 33-260）と、クラレンス・リードの『Dancin' with Nobody But You』（SD 33-307）は、＜Atco＞から＜Alston Records Series＞としてそれぞれ発売。1972年から1973年の間に、ビギニング・オブ・ジ・エンドの『Funky Nassau』（SD 33-379）や、ベティ・ライトの「Clean Up Woman」（4601）を含む『I Love The Way You Love』（SD 33-388）などの5作品がAtlanticによる配給で発売されました。Atlantic／Atcoとの配給契約が終了した1974年の夏には4400番台シリーズとして、自らの＜T.K.＞にレーベル権利を移します。このレーベルには、先に紹介したアーティストの他にも、魅力的なアーティストが多く所属しており、ミルトン・ライト『Friends And Buddies』（4401）、ハーマン・ケリー＆ライフ『Percussion Explosion!』（4409）、ルー・カートン『Just Arrived』（4411）などの作品があります。さらに＜Alston＞ではアルバムこそ残さなかったものの、J.P. ロビンソン、ジョージ＆グウェン・マックレー、ジミー"ボー"ホーンなどが在籍。このレーベルは、1981年に＜T.K.＞が廃業となるまで続く大きな存在であり続けました。

1953年マイアミ生まれのベティ・ライト。7人兄弟（姉妹）の中で一番若い末っ子でした。ベティ・ライトといえば、何と言っても「Clean Up Woman」の大ヒットが思い浮かびますが、そのキャリアのスタートはやはりゴスペル。幼少の頃からゴスペルに親しみ、ファミリー・グループEchoes of Joyでなんと2才の頃から歌い始め、同時にレコード録音も経験し、これは1956年に発売されました。このグループが解散する1965年までベティは活動を共にしています。グループ解散後、ゴスペルからR&Bへとスタイルを変え、地元で活動を続けます。転機は1968年。遂に＜Alston＞と契約を結びます。＜Alston＞での1stシングルとなった「Girls Can't Do What the Guys Do」（4569）はプロデューサーであるクラレンス・リードと、ウィリー・クラークの手によるもので、R&Bチャートで15位となるヒットを記録。1970年には「Pure Love」（4587）を発売し、R&Bチャートで40位のヒット。そして1971年11月、あの「Clean Up Woman」（4601）がR&Bチャートで2位を記録する大ヒットとなりました。その後も「Baby Sitter」（4614）「It's Hard to Stop」（4617）「Let Me Be Your Lovemaker」（4619）「Tonight is the Night」（3711）などのシングルヒットを記録していき、1969年から1979年までの間に彼女がチャートに送り込んだ曲は2ダース（つまり24曲）を超えるほどになりました。ベティは1981年に＜T.K.＞が廃業するまで在籍し、その後は様々なレーベルを経て、現在も活動を続けています。

クラレンス・リードは1939年（45年説もあり）ジョージア生まれ。シンガー・ソングライター、プロデューサーとしてヘンリー・ストーンの持つ様々なレーベルでその名前を見る事ができます。ベティ・ライト、サム＆デイヴ、グウェン・マックレーなどに楽曲提供していました。彼自身にとって初めてチャート・インしたシングルは、アイズレー・ブラザーズが1969年に発売し、R&Bチャートで1位を獲得した「It's Your Thing」に対するアンサー・ソングと言われている「Nobody But You Babe」（4574）。この曲はR&Bチャートで7位という大ヒットを記録しました。ホーン・セクションによるイントロから、いかにもファンキーという言葉がピッタリの休符を生かしたリフと、それまで抑えていた感情が一気に溢れ出す様なサビのグルーヴ感が堪らない一曲。この曲を収録したアルバム『Dancin' With Nobody But You』（SD 33-307）も1969年に発売されました。

ALSTON - Recommended Discs

Beginning of the End『Funky Nassau』
SD33-379 / 1972年

Betty Wright『I Love the Way You Love』
SD33-388 / 1972年

Herman Kelly & Life『Percussion Explosion!』
4409 / 1978年

実際の活動期間は約7年間と短いものの、T.K.の中でも突出してR&Bやファンクに特化

＜Blue Candle＞は＜T.K. Records＞の子会社として主にR&Bやファンクといったジャンルに特化していたレーベルでした。実際に活動していた期間は1972年から1979年までの約7年間という短い間であり、残念ながら大きな成功を収める事はありませんでしたが、現時点で判明している範囲では、1972年から1976年の間にアルバムを5枚と、シングルを22枚残しています。最初のシングルとなったのは1972年に発売されたオーシャン・ライナーズの「Funky Pants ／ Cutting Room」（1493）でした。オーシャン・ライナーズはベティ・ライトのツアー・バンドで、ジェローム・スミス（g）、アンソニー・ターナー（b）、ロバート"ショットガン"ジョンソン（dr）、そしてホーン・セクションのリーダーを務めていたロナルド・スミスなどが在籍していたバンドです。つまり、後のKC&ザ・サンシャイン・バンドの核となるメンバーも所属していました。次に発売されたセカンド・シングルは黒人シンガー、ロバート・ムーアをフィーチャーしたオール・ザ・ピープルの「I Wish I Had A Girl Like You／A Fool In Love」（1494）でした。その後も「Whatcha Gonna Do／Cramp Your Style」（1496）、ロバート・ムーアのソロ・シングル「Tears Of The World ／ Jimmy Bo Charlie」（1499）などを発売しますが、どれもチャート入りは果たせませんでした。

＜Blue Candle＞にはT.K.のセッション・ギタリストである、ナサニエル"スヌーピー"ディーンも在籍。彼は、1976年に6枚のシングルを残し、1977年に生涯でたった一枚のソロ・アルバム『Wiggle That Thing』（55057）を残しています。シングルで発表された曲はアルバムには収録されておらず、アルバムの曲はシングルとして発売されていません。スヌーピー・ディーンのギター・プレイはジョージ＆グウェン・マックレーや、ジミー"ボー"ホーンなど多くのレコードで聴く事ができますが、さらにその他のアーティストへの楽曲提供も行っていました。皮肉な事に、彼自身の作品はヒット・チャートに上がる事はありませんでしたが、彼が残したシングルやレコードはコレクターの間でとても人気があります。中でも「Shake 'N' Bump」という曲は「Part 1 & 2」（1505）と、「Part 3 & 4」（1506）として発売されています。残念なことにスヌーピー・ディーンは1998年に糖尿病を患って亡くなっています。

＜Blue Candle＞から一番最初に発売されたアルバムはポーレット・リーブスの『Secret Lover』（55055）でした。1976年に発売されたもので、プロデュースはクラレンス・リードとクレイ・クロッパー。ゴスペルからスタートした彼女は70年代中期にマイアミのR&Bシーンに飛び込み、＜Blue Candle＞と契約。1stシングルとなったのは「Secret Lover／Love the Hell Out of Me」（1514）で、これはヒットしませんでしたが、1977年に発売した「Your Real Good Thing's About to Come to an End」（1516）がR&Bチャートで89位まで上昇。次に発売したヒット・シングル「Jazz Freak」（1526）を収録した2ndアルバム『All About Love』（55058）は1977年に発売されました。現在では自身のルーツに立ち返ってゴスペル音楽を歌っており、2007年には『My TIme to Worship』、2008年に「Kitchen Sink to His Feet」といった作品を残し現在も現役で活動中です。

ポーレット・リーブスに続いて発売されたのがThe 13th Floorの『Steppin' Out』（55056）です。リード・ヴォーカル＆サックスのライオネル・グリーンとヴィンセント・マーティン（g）、ミッチ・ワドリー（b）、ドーネル・ウェイド（dr）という4人組。彼らのプロデューサーは長い間音楽業界で活動を続け、リトル・ミルトンやフォンテラ・バス等も手掛けたオリヴァー・セイン。彼らの音楽は、当時ヒット・チャートに上る事はありませんでしたが、現在のレア・グルーヴ市場に於いて抜群の人気を誇っています。そんな彼らが残したシングルは、「Leanin' ／ Gino Laka Nani (What's Your Name)」（1513）、「Get Up Y'All ／ Learnin'」（1516）の2枚。

BLUE CANDLE - Recommended Discs

Paulette Reaves『Secret Lover』
55055 / 1976年

The 13th Floor『Steppin' Out』
55056 / 1977年

Snoopy Dean『Wiggle That Thing』
55057 / 1977年

ヘンリー・ストーン、スティーヴ・アライモ、ウィリー・クラークという3人の手によって1969年にスタート

＜Cat＞は1969年にヘンリー・ストーンとスティーヴ・アライモ、そしてウィリー・クラークが始めたレーベルです。初期に契約したグループは、ジェイムス・ナイト＆ザ・バトラーズ『Black Knight』(711) や、ベティ・ライトのツアー・バンドを経た後に、KC&ザ・サンシャイン・バンドの核となるメンバーも在籍していたオーシャン・ライナーズなどがいました。しかしこのレーベルで最も有名なのは、何と言ってもグウェン・マックレーと、リトル・ビーヴァーではないでしょうか。

リトル・ビーヴァーは24歳の頃（1969年）にウィリー・クラークと契約を交わした後、ヘンリー・ストーンの元で、オーシャン・ライナーズの様に、スタジオ・ミュージシャン、ソングライター、プロデューサーとして働き始めます。彼の仕事で一番有名なのは何と言ってもベティ・ライトの「Clean Up Woman」でしょうか。あの印象的なギター・カッティングによるイントロのフレーズは何度も繰り返して聴きたくなるような魔法がかかっていると思います。そして、自分自身でもレコード制作をスタートさせ、ファースト・シングル「I'm a Man Just Like You ／ Don't Let It End This Way」（1974）を発売するもチャートには入らず。しかし1972年の1月に発売したセカンド・シングル「Joey」（1977）はR&Bチャートで48位を獲得するヒットとなります。その次に「Wish I Had a Girl Like You」（1991）をリリース。そして1974年の夏に発売したシングル「Party Down」（1993）は第2位を獲得するという大ヒットを記録します。リトル・ビーヴァーのスウィートで滑らかな音色のギター・サウンドはもちろんのこと、そのヴォーカルが何とも言えない魅力を醸し出し、爽やかなマイアミの空気を感じさせる曲でした。その後もいくつかシングルを発売しますが、「Party Down」を超えるようなヒットは遂に生まれませんでした。アルバムの方に目を向けると、彼はこのレーベルに5枚のソロ・アルバムを残しています。順に『Little Beaver（1972年）』（1601）『Black Rhapsody（1974年）』（1602）『Party Down（1974年）』（2604）『When Was the Last Time（1976年）』（2609）、そしてWillie "Beaver" Hall名義で『Beaver Fever（1980年）』（2615）を発売しています。余談となりますが、1974年の『Party Down』には1曲だけあのジャコ・パストリアスが変名で参加しており、これが彼の初レコーディングではないかと言われています。

グウェン・マックレーは1967年頃から、後に夫となるジョージ・マックレーと活動を共にします。二人はそれぞれソロ・デビューへと歩を進めていきます。ジョージ・マックレーは＜T.K. Records＞と契約、グウェン・マックレーは70年代の初期にヘンリー・ストーンと契約を交わして＜Cat＞へ在籍することとなります。彼女が＜Cat＞から発売したシングルで、初めてチャート・インしたのは「For Your Love」（1989）で、R&Bチャートで17位を獲得。それは1973年の秋のことでした。翌1974年の春には「It's Worth the Hurt」（1992）がR&Bチャート66位のヒットとなります。そしてこの年のヒットで忘れてはならないのが「Rockin' Chair」（1996）です。この曲はR&Bチャートで彼女にとって初の1位を獲得。さらにポップ・チャートでも9位まで上がる大ヒットを記録しています。この曲のバッキング・ヴォーカルにはジョージが参加しており、グウェンもまたジョージの大ヒット曲「Rock Your Baby」に参加しています。さらに、ジョージ＆グウェン・マックレー名義で1975年に『Together』（2606）というアルバムを残しています。このアルバムは、後年様々なヒップホップ系のアーティストにサンプリングされることになる名曲「The Rub」を収録しており、休符を生かしたファンキーなベース・ラインがなんともクセになる1曲。

このレーベルには彼らの他にも、何組かのアーティストが在籍していました。3枚のシングルと1枚のアルバムを残したけれど、チャート入りは果たせなかったロウ・ソウル・エクスプレス、白人と黒人の男性デュオとしてアルバムを残したチョコレート・クレイ、女性ヴォーカリスト、ドナ・アレンをフィーチャーしたトラマなどが在籍していましたが、ディスコ音楽市場の盛り上がりも次第に落ち着きを取り戻し始め、＜Cat＞は1980年を境に徐々に縮小していきます。

CAT - Recommended Discs

James Knight & the Butlers『Black Knight』
711 / 1971年

Little Beaver『Party Down』
2604 / 1974年

Gwen McCrae『Rockin' Chair』
2605 / 1975年

Dash 1971年に始まった初期はシングル盤をメインに発売し、後年はディスコ・ミュージックに傾倒

＜Dash＞が1971年にスタートした当時は主にシングルを発売していくレーベルでした。1stシングルとなったのは、ヘレン・スミスの「My Love Ain't Good to Me ／ You Never Say You Love Me」（5001）。2ndシングルとなったのがサンダー・ライトニング＆レインの「Let's Stay Together ／ Blues For Mama」（5002）。このグループは、リトル・ビーヴァー（g）、ロン・ボグドン（b）、ロバート・ファーガソン（dr）によるトリオ編成のグループで、ここに収録されている「Let's Stay Together」はアル・グリーンのあの曲です。これらはヒットしませんでしたが、＜Dash＞は1976年に心機一転、フォクシーと契約します。5人組の彼らの中には、あのティト・プエンテの息子であるリチャード"リッチー"プエンテ（perc.）も在籍。彼らの音楽は言わばラテン・ディスコと呼べる様なもので、1stシングル「Get Off Your Aahh ！ And Dance（Part 1）」（5022）は1976年の春に発売され、R&Bチャートで39位を記録。＜Dash＞から発売されたシングルとして初めてチャート・インしたのもこの曲です。そして、彼らを代表する曲と言えば何と言っても「Get Off」（5046）です。レーベル・メイトであるクラッカーのカーロ・ドリッグスをリード・ヴォーカルに迎えたこの曲は1978年に発売され、R&Bチャートで1位を獲得。同年、アルバム『Get Off』（30005）を発売し、これはR&Bチャートで3位を記録する大ヒットとなりました。

1978年に発売されたオバタラの『Obatala』（30006）。このグループはアルバム1枚だけを残して解散してしまったグループですが、内容的には「Shades Of September」に聴かれる様なエレガントでソフィスティケートされたサウンドでAORファンにもお勧めできる爽やかなフュージョン＆ファンクといった趣。1曲目にジャズ・スタンダード「I'll Remember April」を持ってくるあたり他のバンドとはひと味違った魅力を醸し出しています。

このレーベルは他にも、ライス＆ビーンズ・オーケストラ、T-コネクション、アシャ、スタイリスティクスなども在籍していました。

DASH - Recommended Discs

T-Connection『Magic』
30004 / 1977年

Foxy『Get Off』
30005 / 1978年

Obatala『Obatala』
30006 / 1978年

Drive マイアミ・ソウルを支えた腕利きのスタジオ・ミュージシャン集団である"マイアミ"が在籍

＜Drive＞はマイアミを拠点に、ヘンリー・ストーンとスティーヴ・アライモによって所有されていたレーベル。ここからヒット曲を出したアーティストのひとつがマイアミというバンド。R&Bチャートで51位を記録した「Party Freaks」（6234）などを始めとして、いくつかのヒットを出します。この曲が収録された『The Party Freaks』（101）は、1974年に発売され、チャート・インこそしませんでしたが、マイアミのホテルの夜景を使用したとても雰囲気のあるジャケットが素晴らしい1枚。全編に渡ってファンク路線の楽曲が並びます。マイアミは黒人シンガー、ロバート・ムーアをリード・ヴォーカリストにフィーチャーし、ウォーレン・トンプソン（g）、ボビー・ウィリアムソン（key）、ウィリー・ジャクソン（b）、フレディ・スコット（dr）などといったメンバーで活動。ヒット曲「Kill That Roach」（6251）を収録し、1976年に発売された『Notorious Miami』（102）はR&Bチャートで57位となるヒットを記録。＜Drive＞には全部でアルバム3枚とシングル8枚を残しています。

1977年に大ヒットしたピーター・ブラウンの「Do You Wanna Get Funky With Me?」（6258）はR&Bチャートで3位となる大ヒット。この曲は＜T.K. Disco＞からも発売され、この曲がディスコ・シングルとして初めて100万枚を超えるセールスを記録する事となりました。この曲を収めた1977年のアルバム『A Fantasy Love Affair』（104）は魅惑的でセクシーなジャケットにも助けられたのかR&Bチャートで9位を記録しています。

このレーベルは他にも、ロッキー・ミゼル＆ザ・シュガー・ロック・バンド『Rocky Mizell & the Sugar Rock Band』（103）や、ジプシー・レーン『Predictions』（106）、ジミー・キャスター・バンチ『Let It Out』（107）、ピーター・ブラウン『Stargazer』（108）、ブレンダ＆ハーブ『In Heat Again』（109）、J.B.'s『Groove Machine』（111）など多くのアルバムを残しています。

DRIVE - Recommended Discs

Miami featuring Robert Moore『The Party Freaks』
101 / 1974年

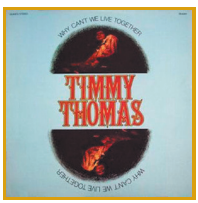
Miami『Notorious Miami』
102 / 1976年

Peter Brown『A Fantasy Love Affair』
104 / 1977年

ヘンリー・ストーンによって1959年にスタートし、ティミー・トーマスの大ヒット曲を発売

＜Glades＞は1959年にヘンリー・ストーンによって、マイアミで設立されたレーベル。ここから初めて発売されたシングルはデイヴィ・ジョーンズ（ちなみにあのモンキーズの人ではありません）のもので、ドゥー・ワップ・バラードの「No More Tears」と、アップテンポな「Tootsie Wootsie」をカップリングしたもの（601）で、1959年に発売。翌年には「I Was Blind ／ The Chase」（605）を発売しますが、どちらもチャート入りはしませんでした。1970年代に入ると、＜Glades＞はソウル／ R&B色をより強めていきます。この時シングル番号に充てられたのが1700番台。最初に出されたシングルはクラレンス・リード＆グロリア・ポーターの「Why Baby Why, Parts 1 & 2」（1701）で、次に、ジョージ・マックレーの「Love Who You Can ／ Back Dues」（1702）が続きますが、ヒットには恵まれず。しかし、三度目の正直という言葉があるように、3枚目のシングルで遂に金脈を掘り当てました。それが1972年に発売し、大ヒットを記録したティミー・トーマスの「Why Can't We Live Together」（1703）です。ティミー・トーマスはメンフィスで＜Goldwax＞の為にスタジオに入りレコーディングをしていましたが、中々ヒットに恵まれず、マイアミに引っ越しました。この曲はオルガンとドラム・マシーン（ビート・ボックス）によるオリジナリティのある印象的なサウンドがユニークなもので、悲し気なヴォーカルと、そこに込められた普遍的なメッセージが人々の心を打ち、R&Bチャートで1位、ポップ・チャートでも3位となる大ヒットとなりました。この曲を収録して1973年の1月に発売された『Why Can't We Live Together』（33-6501）はR&Bチャートで10位を記録しました。

このレーベルには他にも、ラティモア、アイリーン・リード、セヴン・シーズ、リトル・ミルトン、ファンキー・ブラウンなどがレコードを残しています。



GLADES - Recommended Discs

Timmy Thomas『Why Can't We Live Together』
33-6501 / 1973年

Latimore『More More More Latimore: Let's Straighten It Out』
6503 / 1974年

Funky Brown『These Songs Will Last Forever』
7514 / 1977年

フレデリック・ナイトと、クリントン・ハリスによって1975年にスタートし、アニタ・ワードのディスコ・アンセムを発売

＜Juana＞はフレデリック・ナイトとクリントン・ハリスによって、1975年にアラバマでスタートしたインディ・レーベル。1980年まで＜T.K.＞によって配給されており、1981年に＜T.K.＞が廃業となった後は自主配給していましたが、同年末にH&Lによって配給。しかし1982年には再び自主配給という形に落ち着いています。

1944年にアラバマで生まれたフレデリック・ナイトは、1972年に＜Stax＞から発売した「I've Been Lonely For So Long」（0117）がR&Bチャートで8位を記録する大ヒットを記録。＜Juana＞からは3枚のオリジナルアルバム『Knight Kap』（200,000）『Let The Sunshine In 』（200,003）『Knight Time』（JU-4000AE）を発売しています。

そのフレデリック・ナイトによって発掘され、クリントン・ハリスがしばらくマネージャーを務めていたのが、コントローラーズ。彼らは初めて＜Juana＞と契約したグループでした。彼らの2ndシングル「The People Want Music」（3406）は＜Juana＞にとって初めてチャート・インしたレコードでR&Bチャートで82位を記録。1977年に発売した「Somebody's Gotta Win, Somebody's Gotta Lose」（3414）はR&Bチャートで8位を記録する大ヒットとなりました。「I Can't Turn The Boogie Loose」（3424）や「We Don't」（3426）を収録したアルバム『Next In Line』(200,005) は1980年に発売され、R&Bチャートで47位となっています。

1979年の夏にディスコ・アンセムとなり、ポップ／ R&B／ディスコといったそれぞれのチャートで1位を記録する大ヒットとなった「Ring My Bell」(3422) を歌ったのがアニタ・ワード。そしてこの曲を収録した『Songs of Love』はR&Bチャートで2位を記録しています。

JUANA - Recommended Discs

Frederick Knight『Knight Kap』
200,000 / 1977年

Anita Ward『Songs of Love』
200,004 / 1979年

Contorollers『Next In Line』
200,005 / 1980年

ニュー・ソウル・ディーヴァ ジョス・ストーン

芽瑠璃堂マガジン『ROOT』第2号はいかがでしたか?今回はマイアミ・ソウルの本家本元であるT.K. Recordsを特集したわけですが、お楽しみ頂けたでしょうか。本誌に掲載した各レーベルの作品を末永くご愛聴して頂けたら嬉しいです。

マイアミ・ソウルと言えば、2003年に『Soul Sessions』で華々しくデビューを飾ったジョス・ストーンを思い出す人も現在では多いのではないでしょうか。ジョス・ストーンは1987年にイギリスで生まれた女性ソウル/R&Bシンガー。ストーンと言ってもヘンリー・ストーンと血縁関係があるわけではなく、本名はジョセリン・イヴ・ストーカーと言います。幼少時代にはアレサ・フランクリンや、ダスティ・スプリングフィールドといったソウルやR&Bなどを聴いて育ち、随分と影響を受けたと語っています。

この『Soul Sessions』はその名の通り、主に60年代から70年代にかけてのソウルの隠れた名曲や玄人好みの曲をカバーしたものであり、16歳とは思えない程の歌声で発売当時かなりの話題となりました。敢えて有名どころの曲を外したその選曲からはジョス・ストーンや、プロデューサーの意気込みを感じ取ることができます。

個人的に凄く好きで、何度もリピートしてしまうのが2曲目に収録されている『Super Duper Love (Are You Diggin' on Me)』。イントロや間奏のギターはリトル・ビーヴァーが弾いており、バッキング・コーラスにはベティ・ライトも参加。この曲のオリジナル・アーティストはウィリー・シュガー・ビリー・ガーナーで、1975年にシングル発売された曲です。この曲を収録したアルバム『Super Duper Love』は2007年にP-VINEから紙ジャケット仕様でCD化されています。

ジョス・ストーンは2004年の5月にセカンド・シングルとしてカットしており、英国シングル・チャートで18位となるヒット。B面(または2曲目。この曲は7インチ&CDシングルで発売)にはジェイムス・ブラウンの『It's a Man's Man's World』のライヴ・バージョンが収録されていました。

また、純粋なソウルではありませんが、意外な選曲として、ジョン・セバスチャンの『I Had A Dream』オルタナティヴ・ロック・バンド、ホワイト・ストライプス(2011年に惜しくも解散)の『Fell in Love with a Boy』(ファースト・シングルとしてカットのカバーも含まれています。

そして、この『Soul Sessions』に参加したのがマイアミを代表する一流のアーティスト達。ベティ・ライト、ベニー・ラティモア、リトル・ビーヴァー、ティミー・トーマスなど。マイアミ・ソウルの一時代を築き、今も現役で活動しているミュージシャン達がここぞとばかりに集まり、当時16歳の女の子のバッキングを務めました。さらにネオ・ソウルのアンジー・ストーンもコーラスで参加。プロデュースを務めたのはベティ・ライトとS-Curve Records(現在ダイアン・パーチやデュラン・デュラン等が在籍)のスティーヴ・グリーンバーグ。さらに曲によっては、オーガニックな生音ヒップホップを聴かせるザ・ルーツのドラマー、クエストラヴ。さらにスティーヴ・ヴァイやエクストリームでドラムをプレイし、現在はドリーム・シアターに加入しているマイク・マンジーニが担当しました。

この『Soul Sessions』はイギリスのアルバム・チャートで第4位まで上がる大ヒットを記録しています。本作で聴けるジョス・ストーンの歌声はあまりにもソウルフルで渋く、時には幼さの残る瞬間もあるにせよ、ソウル・ミュージックを自分なりに吸収した力強さが十分に伺えます。ベティ・ライトに歌唱指導を受けたようですが、それにしたってとても16歳の女の子が歌っているとは思えないほど。つまり彼女には天性のものがあったと思うし、それに驕ることのない、血の滲む様な凄まじい努力の賜物でしょう。

実際、その反動なのかはわかりませんが、2004年のセカンド・アルバム『Mind Body & Soul』発売後、喉の治療を受けており一時的に活動を休止しています。そのヴォーカルの衝撃を例えるなら(安直過ぎるきらいがあるにせよ)エイミー・ワインハウスのそれと同列に語る事ができるかもしれません。

ちなみにジョス・ストーンは2011年までに5枚の作品を発表しており、2011年の最新作『LP1』では、ユーリズミックスのデイヴ・スチュワートをプロデューサーに迎えて制作されています。この作品でもまた、ソウルフルな歌声は健在。

さらにジョス・ストーンは、そのデイヴ・スチュワートと、ローリング・ストーンズのミック・ジャガー、ボブ・マーリィの息子のダミアン・マーリィ、インドの作曲家&キーボーディストのA.R.ラフマーンと共にスーパーヘヴィを結成。アルバムも発売されました。

個人的に気になっているのはヴァイオリンを弾いているアン・マリー・カルフーン。ジェスロ・タルのライヴにゲスト参加したり、ロビー・ロバートソンの『ハウ・トゥ・ビカム・クレアヴォヤント』や、スティーヴィー・ワンダー、リンゴ・スター、ボン・ジョヴィ、スティーヴ・ヴァイ、デイヴ・マシューズ・バンド、ワイドスプレッド・パニックなどのアルバムやライヴ等にゲスト参加している彼女の弾くヴァイオリンは、この大御所だらけのスーパー・グループの中でも良いアクセントとなり、ひと際耳に残る存在感。

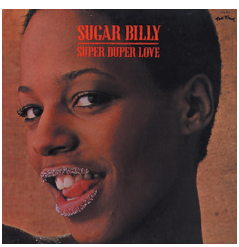
いずれにせよジョス・ストーンと共にこれからの作品も、ますます楽しみなアーティストの一人です。

次回の発行は11月を予定しています。詳細が決まり次第、私のブログで随時発表していくので、こちらの方もよろしくお願い致します。

編集人=葉月賢治　発行人=長野和夫
芽瑠璃堂マガジン編集部

ご意見:mmagroot@gmail.com

本誌『ROOT』では、読者の皆様のご意見を元に、より良い雑誌を作ることを目標に努力して参ります。その為には、皆様の貴重なご意見が必要です。なんでも結構ですので、ご意見をお寄せ下さい。



♪ミロスラフ・ヴィトウス『インフィニット・サーチ』

増尾好秋『24』を聴いて、ぼくは真っ先にあるアルバムを思い浮かべました。それはミロスラフ・ヴィトウスの『インフィニット・サーチ』です。ヴィトウスはチェコ出身のベーシスト。ハービー・マンのバンドを経て、ウェザー・リポートの結成に携わりました。本作はその合間に録音されたものですが、ほかにマハヴィシュヌ・オーケストラ結成前のジョン・マクラフリン（ギター）、マイルス・デイヴィス・バンド脱退後のハービー・ハンコック（フェンダー・ローズ）、マイルス・バンド時代のジャック・ディジョネット（ドラムス）が加わり、とにかく熱く激しいサウンドを聴かせてくれるのです。

インターネットも何もない時代、日本のジャズ・ミュージシャンが最も参考にしたのは「海外の新譜レコード」であるといいます。それを聴き、研究し、自分のものに取り入れて表現したわけですね。60年代後半から70年代前半にかけての一種のジャズ（ジャズに限らないかもしれませんが）が持つ、一種形容しがたい焦燥感。このアルバムの「アイ・ウィル・テル・ヒム・オン・ユー」や「フリーダム・ジャズ・ダンス」には、それが痛いほど反映されています。

2011年9月15日(木) 原田和典

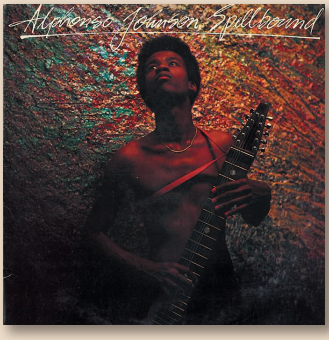
♪アルフォンソ・ジョンソン『スペルバウンド』

ところでさきに「ウェザー・リポートはジョー・ザヴィヌルとウェイン・ショーターが共同で結成したバンド」と書いてある資料を見かけますが、マイルス・デイヴィス・バンドをやめたショーターとハービー・マン・バンドを離れたヴィトウスが新たなバンドを組もうと考えた結果、キャノンボール・アダレイ・バンドから独立したばかりのジョー・ザヴィヌルの起用を思い至った、というのが真相に近いはずです。

ヴィトウスはグループ結成から74年まで在籍します。その後、ウェザーに加入したのがアルフォンソ・ジョンソンです。ジャコ・パストリアス以前にフレットレス・ベースを弾きこなし、ウディ・ハーマンやキャノンボール・アダレイのバンドでも演奏経験のある名手ですが、一般には「ヴィトウスとジャコの間にウェザーに所属した、ちょっと地味な奏者」という評価に落ち着いているようです。

なんとももったいない話です。自由奔放に飛翔する彼のベース・プレイと曲作り、ファンクとプログレッシヴ・ロックを無理やり高速攪拌したかのような音作りは、今なお、新しい音楽リスナーに「再発見」される日を待っているのです。

2011年9月20日(火) 原田和典



REOスピードワゴン～涙のレター♪

10月5日と19日の2回に分けてREOスピードワゴンのEPIC時代の（ほぼすべての）アルバムが紙ジャケット化されるとのことでいろいろとまた思い出すことが…。

レコード会社さんはこの際‘大人買い’をしてもらお～ということで雑誌なんかと組んでいろいろとあれしてはるようですが、こういう紙ジャケ盤っちゃうのはまず初回限定なんで在庫が無くなった時点で「はいお終いっ」。あとはプレミア付きになってしまいますんで「えいやっ」といかざるを得んのですが、まぁ今回は本邦初発売盤と初CD化盤がそれぞれ4枚づつ計8枚も（しかも日本独自の紙ジャケで）用意されてるんで…。そこんとこよう考えとくなはれや～。

REOといえば「涙のレター」を皮切りに日本で大ブレイクして今年でちょうど30年！（うわっもうそんなあれに…。）。そして彼らが初来日公演を行ったのも30年前でしかも9月ですわ。9/24=中野サンプラザ、9/24=名古屋市公会堂、9/28=大阪フェスティバルホール、9/29=日本武道館、9/30=新宿厚生年金会館という日程は堂々たるものですな（招聘は当時のユニバーサル・オリエント・プロモーション）。

正直、それ以前の彼らは日本においては知る人ぞ知るグループやったんですけどその1年、いや半年ほどで一気に人気爆発～の結果がこの初来日公演ですわ。1981年2月25日にアルバム「禁じられた夜」と日本先行でのシングル・カット第1弾「涙のレター」が（No.1になった全米での第1弾カット「キープ・オン・ラヴィング・ユー」を何とB面に！）、そして5/21には「テイク・イット・オン・ザ・ラン」、8/26には‘来日記念盤’と銘打って「ドント・レット・ヒム・ゴー」と次々とシングルが登場してラジオ番組等を賑わせましたが、その背景にはもちろん、レコード会社（エピック・ソニー）のあつ～いプロモーションがあったというわけですな。それが彼らの初来日公演に合わせて（？）EPICソニーが企画した一大イベントでありました。今から30年前の1981年9月29日（火）。この日のことはもう、忘れようとしても思い出せない（風啓助じゃがな）っちゃうか…。

2011年9月3日（土）上柴とおる

芽瑠璃道
MeRuRi RoaD

芽瑠璃堂の原点を辿って～その2

～前回までのあらすじ

芽瑠璃堂のルーツを考える。その結果改めて確認できた事は、吉祥寺で始めた小さな店の事。さらにそのルーツのルーツに思いを馳せると、高校卒業後に組んだバンドの連中と、憧れであったアメリカへ音楽探究の旅に出た事だろうと思い当たった。それは1973年の夏のこと。自分の目と耳で本場の音楽を体験したくなって、アメリカへ渡る計画を立て、資金が貯まるまで約2年。遂に計画は実行へ移された。

出航の朝をついに迎えることができた。この日の興奮は今でもはっきりと憶えている。コツコツと貯めたお金で僕らなりの計画が着々と進み、遂にその当日を迎えたわけだからそれも当然、感無量だ。何と言っても夢が現実へと進む第一歩が始まる特別な日だ。こんなにワクワクする気持ちになったのは、小学生の時に体験した遠足の前夜以上かもしれない。僕らの買ったサンフランシスコ行きの船のチケットは、今では考えられない事だが、飛行機で行くよりもかなり安いものだった。実際に買った料金を思い出してみると、1973年3月から本格的に変動相場制が始まり、1ドル260円～300円換算で確か10万円位。飛行機は15万円位だったかな。最初は貨客船がもっとも安く渡米できる手段と聞いて調べまくったがダメだった。豪華客船は高級なイメージがあるが、実際に調べてみると部屋によって様々な価格設定があり、予算も出発時期もピッタリの船が見つかった。何よりも豪華客船のパンフレットを親に見せれば安心してもらえることは容易に想像できた。ただし横浜港を出て、サンフランシスコに着くまで2週間。これは値段に関係ない。だがその2週間もバンドのメンバー 4人が一緒だから全然気にならないだろうし、のんびり勉強することだってできると思っていた。とにかく時間は充分ある。全ての仕事を辞めた今はブータローだ。ここで、このアメリカ旅行を共にした仲間を紹介しておきたい。実の兄であるフミちゃんと、バンド・リーダーのタモちゃん、モンマちゃん、そして僕。「芽瑠璃道 Meruri Road」では頻繁に登場するメンバー達だ。実は僕たちのバンドにはもうひとりメンバーがいたのだが、彼は一緒に行く事ができなかった。

船は想像していた以上に豪華なもので、プール付きの世界一周船。僕らの部屋はその中でも一番安い4人部屋で、2段ベッドが左右にある小部屋だ。まぁ贅沢は言えない。一番下のランクと言っても食事はみんなと一緒だ。毎日豪華な食事付き。さらに食事の時は正装が義務。これには参った。サンフランシスコに着く頃には持っていった長袖のシャツは全てヨレヨレ。船の中ではお金さえ払えばクリーニング・サービスは完璧だが、僕らは無駄使いしたくないからシャワールームで石けん付けてマイセルフ。食事が終わればバンド演奏付きのクラシックなダンス・パーティーが始まる。ある者はダンスし、ある者は酒を飲み、ある者はトランプ等のお遊び。僕らと言えば節約のために無駄なお金は使えない。船が動き出した数日は船酔いに襲われた。来る日も来る日も果てしない海と水平線。さらに船酔いにプラスして日本食がまったく出ない事もあり食欲はゼロ。しばらくベッドで横になっていた。多少、船での生活に慣れてくると船の中を探検したり、バンド演奏をチェックしたりした。夜は楽しいが、やることがないと時間ばかり持て余してしまって、コレは結構辛いものがある。

出航前の僕らは箱バンをやっていた。夜は新宿のダンス・ホール、それが終わってから六本木のクラブへ。毎日くたくたになるまでプレイしていた。当時の状況を少し説明しよう。ディスコ、ゴーゴークラブと呼ばれていた踊れる場所が東京だと新宿、六本木の繁華街に店を構える。今ではDJがお皿をまわして場を作るがその役目を生バンドがやる。演奏力で競い合うため、必然的にうまいバンドには客が集まる。オール外人のフィリピン・バンドが人気があった。概ね2バンドが90分交代で「切り替え曲」を決めてノン・ストップでプレイするのだが、この「切り替え曲」で多かったのはジャズの名曲「テイク・ファイブ」。ワン・コードでひとつぐらい楽器の音が出ていない瞬間があっても問題ない曲だ。そんな箱バンはキツかったがギャラはそこそこいい。僕らは小さなプロダクションに所属していたので1年も経つと実力も付き、東京に限らず地方のあっちこっちへ行くはめに。当時は「時間が欲しい」って何度叫んだことか。それが今では時間が余りに余っている。

船での雇われバンドは、ジャズやバック・グラウンド・ミュージックを中心にしたヴォーカルなしのインストもので、50歳を過ぎたオヤジ・バンド。僕らみたいに若い連中が多く乗っている客層には向いていない。1週間も毎日顔を見合わせていると外国人も日本人もお互いに親しくなってくる。気が付けば僕ら4人が元バンドマンであり、アメリカ音楽が好きでその音楽で食っていくという大きな夢があることも船中に知れ渡っていた。当初の予定では1週間後にハワイに立ち寄る予定だったが、ハリケーンの影響で海が荒れていたこともあり航行変更。サンフランシスコに直行となってしまった。これで2週間、この船に箱詰めとなるのだ。さらに後半には更に海が荒れてきて、昼間でも甲板に出られない。食事もとっくに飽きたし、持っていったインスタントラーメンも底が尽きた。夜が長く感じる毎日だ。日本人の連中とは航行変更の事もあり、船会社との一連の交渉で徐々に一体感が生まれてきた。次第に不満も耳に入ってくる。中でもオヤジ・バンドの演奏については若い人のリクエストのほとんどに応えられないということで僕らに自然と声がかかってきた。楽器機材はオヤジ・バンドのものを使用すればできないこともないが、いや一困った。だが、みんなが楽しめればと思いやる事にした。CCRの「プラウド・メアリー」に始まり、レア・アースのバージョンを下敷きにしたテンプスの「ゲット・レディ」など、定番ディスコ・ミュージックのオンパレード。チークタイム用のスローはと言えばビートルズの「サムシング」や「イエスタデイ」さらにジョン・レノンの「ラブ」などその場の雰囲気で選曲。ショッキング・ブルーの「ヴィーナス」、キャロル・キングの「イッツ・トゥ・レイト」、クリスティの「イエロー・リバー」。サンタナの「ブラック・マジック・ウーマン」は最後の盛り上げ用に延々10分。さらに締めにシナトラの定番「マイ・ウェイ」までサービス満点の洋楽てんこ盛り、ノン・ストップで約1時間。今考えると超恥ずかしい選曲だが、これが予想外に大受けした。至るところで外国人も日本人もみんなが踊り出す。そりゃ当然さ。僕らは2年間必死で箱バンをやっていたからレパートリーだけでも200曲以上。客をノセる術は心得ている。翌日から僕らは英雄扱い。すれ違う外国人の客からも声がかかる。そんな訳でこの日から数回、オヤジ・バンドの後に演奏するはめになったが、それはそれで楽しいものだった。「やっぱり僕らは凄いんだ、アメリカでもやっていける」なんて思い始めた。しかしその後のアメリカ生活で、この自信がズタズタに打ちのめされることになろうとは僕ら4人、誰も想像すらしていなかった。

文＝芽瑠璃堂店長

登場人物

僕（ドラムス）、フミちゃん（サイド・ギター）、タモちゃん（リード・ギター）、モンマちゃん（ベース）

超恥ずかしいが、横浜港から出航する前に船の前で撮ってもらった両親と兄との記念写真。一番左が僕。

赤坂にあった有名な「MUGEN」というクラブの写真。当時のディスコはまさにこんな雰囲気だった。